横浜のヒロコ・ムトーさん 神楽坂で展示会

亡き母思い「豆紙人形」

和紙で作った「豆紙人形」を見せるムトーさん＝横浜市港北区で

いじめの怖さやそれを乗り越えるためのメッセージを伝える活動をしているヒロコ・ムトーさん(本名・相沢紘子)＝横浜市港北区、本名・相沢紘子＝は二十三～二十七日、アートガレーカグラザカ(東京都新宿区)で、亡き母が作った小さな紙製の人形「豆紙人形」の展示会を開く。ムトーさんは「病気を抱えながら制作した母の前向きだった姿を知ってほしい」と話している。(志村彰太)

あすから

ムトーさんは五年前まで、作詞家、ミュージカル作家として活動。三十年ほど前、滞在先の米国から二人の娘を連れて帰国すると、「英語をしゃべる」などの理由で転入先の学校で子どもがいじめに遭った。その時は声を上げることができなかったが、作家引退後に「心の宅急便」と称して、小中学校で講演をしている。

母の正子さんは、父が亡くなった後の七十歳からパステル画を習い始め、八十八歳で豆紙人形の制作を開始。高さ三～十㌢で、源氏物語の登場人物や日本の四季の風景を和紙などで鮮やかに再現した人形は、「人の心に訴える何かがある」と共感を呼んで国内外で展示された。

正子さんは緑内障で右目を失明し、大腸がんも患った。ムトーさんは「弱音一つ吐かず、母はいつも笑顔だった」と振り返る。亡くなる前年の二〇〇五年、フランスのパリ日本文化会館で招待展が開かれ、作品の一部は会館に寄贈した。

昨年春、ムトーさんも「見よう見まね」で豆紙人形の制作を始めた。三年前に夫を亡くして失意に暮れていたが、母の作品の続きを作ることに「新しい人生の目的」を見いだした。

会場には、和服姿で掃除する女性や、まりつきをする子どもを表現した正子さんの作品九十一点と、ひな人形などをかたどったムトーさんの作品六十五点を展示。

ムトーさんは「重い病気でもあきらめずに作り続けた母の作品を通して、生きる希望を伝えられれば」と話している。